

第三章「唐風文化と国風文化」は九・十世紀の唐風文化・国風文化の様相と成立過程を述べる。九世紀前半の唐風文化は、中央・地方の大きな社会的変動を梃子にして、人々の間に根強く残る呪術的な意識を取り去り、多くの呪術的風習を消滅させる働きをなし、さらに九世紀後半の国風文化形成の前提となったという。その国風文化とは唐風文化の積極的推進者であった嵯峨上皇の没後、宮廷の様相が変化し、一時影を潜めていた日本的なものを再認識しようとする動きの中で、新しい様相を持って登場した文化であった。かつて概説として著したものが、その域をはるかに超え、読者をして知的興奮すら覚えしめる。

第四章「藤原良房の史的位置」は意外に明らかではない良房の実像に迫る。承和の変において積極的な役割を果たした良房が姻戚関係を通じて嵯峨上皇の家父長的支配を引き継ぐ形で藤原北家の覇権を確立し、さらに摂関家という一つの権門を創出したと説く。また、著者は国風文化の形成においても、良房が古い呪術的意識の復権の動きを主導する役割を演じたと評価している。良房の染殿第は政治的活動の拠点であるとともに、文化的活動の拠点でもあった。今後の良房研究に有益な基礎と示唆を与える論考である。

本書の多くは講演を原稿化したものである。そのため、初学者のみならず研究者にとっても基礎的知識を改めて学び直すことができる。余得というべきか。また、本書に限らないが笹山氏の文章は氏が師事した坂本太郎博士にも似て、直截でけれん味がない。それでいて、否それゆえにこそ、史実に対する確信がじわりと伝わってくる。穏やかだが強く読者に迫る力がある。味読をお勧めしたい。「あとがき」によれば、氏は本書校正中の昨年五月に大病に見舞われ、退院後もなお療養の日々とのこと。ご回復とご養生とを心よりお祈り申し上げて、拙い筆を擱かせていただく。

(とらお・たつや 鹿児島大学法文学部教授)
(A5判、二八〇ページ、九七二〇円、吉川弘文館、二〇二六・一一刊)

本郷真紹監修・山本 崇編

『考証 日本霊異記』上

藤本 誠

まずはこれまで日本文学研究の独擅場であった『日本国現報善惡霊異記』(以下、『霊異記』)の校訂・注釈書が、日本古代史の立場から初めて刊行されたことを喜ぶたい。本書の第一の特徴は、『霊異記』の上巻底本として最も良質な興福寺本について、字配りまで含めて厳密に翻刻したことにある。奈良地域関連資料データベースにより画像が閲覧できるようになったとはいえ、多数確認できる傍書による書き入れや見七消ちまで翻刻されていることは大変有用である。例えば、上巻第十九話(以下、上十九。ほかも同じ)では、表面の『金藏論』の脱文を裏面に書き入れた箇所が正確に翻刻されている。これは興福寺本『霊異記』が『金藏論』の裏面に記されたことの決定的な論拠であり(本書書誌参照)、興福寺本の成立年代の論争のうえでも重要な

意味をもつ。

第二の特徴は、補説が古代史・仏教史のみならず考古学・歴史地理学の成果にまで及んでいる点である。これまでの日本文学の『霊異記』の校訂・注釈書には見られなかったことであり、歴史学において初めての校訂・注釈書にふさわしい。例えば考古学的成果から、上十一の補説では濃於寺の比定寺院として見野廃寺の可能性を、上二十七では春米寺の比定寺院として穂積廃寺の可能性を、いずれも関連地図とともに示している。上十四や上二十五の補説も、考古学的知見を踏まえ、現在の研究状況が的確に整理されており参考になる。

第三の特徴は、各説話の多くに関連地図が付され、さらにその多くに周辺の寺院跡や古道・地名などが記載されており、説話の理解を深めるうえで大変役に立つ点である。例えば、上十には法会の導師を屈請する場面に、「其の使人、問ひて曰はく「何れの寺の師を請けむ」と。答へて曰はく「其の寺を扱はず、遇ふに随ひて請けよ」と」とあり、周辺にいくつかの寺院が存在したことがわかるが、本説話の地図では「添上郡山村里」の場所を比定したうえで、

調査が行われている周辺寺院跡の場所を示し、さらに近接する平城京の位置・方向を簡略に示した図を右上に配しており、説話内容を理解するうえで有用である。

その他、数多くの参考史料の提示や、これまでの研究史を詳細に整理し問題点を示した書誌と、それに付された「興福寺日本本霊異記上巻仮名字体表」および写真版と複製本との対照表も有益である。

その一方でいくつか気になった点もある。

第一に、初版本に編集上のミスと思われる原文翻刻の脱行が、管見の限りではあるが、上二(三五頁)・四(八二頁)・十一(一七五頁)・十四(二〇四頁)の四話の最終行一文と、上六(一二三頁)の後ろから二行目の一文の計五話に見られたことは、大変残念であった。このたび二版(二〇一七年三月三十日発行)が出され上記の点が修正されたことには安堵したが、初版と二版をざっと比較しただけでも、修正箇所は古辞書類の記載を中心として百箇所を超えている。この点についての説明は「後記」に簡単に記されているのみであるが、初版本が出されてすでに二年が経過していること

や、本書が今後の歴史学による『日本霊異記』研究の基礎となりうる一書であることから、「脱行」と「脱字等」の箇所については明示してほしかった。

第二に、近年の日本文学の研究では、『霊異記』の畜類償債譚・冥界説話や編纂論などを中心に中国史料との比較研究が飛躍的に深化しているにもかかわらず、本書では参考文献・補説・語釈も含めて、ほとんど意識されていないように思われる点である。すでに後掲の書評にて指摘されている点を除いても、例えば、上三の道場法師説話については、河野貴美子『日本霊異記と中国の伝承』(勉誠社、一九九六年)によって、第三段の①鬼と人との力比べ、②鬼を四角の火で照らすこと、③鬼の血をたどること、④嚙に死者を埋めることなど、中国説話の各モチーフが指摘されているが、本書では参考文献にあげているにもかかわらず、語釈・補説にはまったく言及がない。

また上十二の枯骨報恩譚について、敦煌本『搜神記』所収説話に類似することを指摘された今野達氏の先駆的研究が参考文献にないことも付記しておきたい。なお、上二十で参考史料にあがっている『釈門自鏡

録」所収説話との影響関係については、すでに評者が指摘したことがある（拙稿「日本霊異記」の史料的特質と可能性―『日本霊異記』の化牛説話を中心として―）『歴史評論』六六八、二〇〇五年）。中国史料からの影響は今後の霊異記研究においてもきわめて重要な論点になっていくと思われるため、中・下巻では、参考文献・語釈・補説に近年の研究成果が反映されることを期待したい。

第三に、書誌に見られる興福寺本の書写年代の論拠である。書誌の執筆者である山本崇氏は、興福寺本表面の『金藏論』について、「手がかりがないが、平安末、院政期ごろの写本ではないかと推測される」（宮井里佳・本井牧子『『金藏論』現存諸本解題』同編著『金藏論 本文と研究』臨川書店、二〇一一年、五四三頁）と提起された見解について、奈良時代から平安初期までの写経料紙は「おおむね五六センチ前後で」、「平安時代後期以降は五一一五センチ前後が普通で、五五センチを超えることは稀である」という田中稔氏の指摘（紙・布帛・竹木『『中世史料論考』吉川弘文館、一九九三年、二〇五―二〇六頁。初出は一

九七八年）に基づき、興福寺本の料紙が「ほぼ五五cm余り」であることから、「料紙による限り、金藏論が書写された時期が平安時代院政期に降る可能性は低い」、「敢えて先行研究の知見に異を唱え書写年代を降らせる点は再考すべき」（四一八頁）と批判している。

しかしながら、写経料紙の幅については、例えば飯田剛彦氏による聖護藏経巻の「神護景雲二年御願経」の調査によれば、七四〇巻中一三四巻（一八％）が五二・九センチ以下の料紙であり（『聖護藏経巻「神護景雲二年御願経」について』『正倉院年報』三四、二〇一二年）、奈良時代写経においても五二・九センチ以下の料紙が約二〇％弱も含まれる事例があることからすれば、「ほぼ五五センチ余り」であることは写経年代が平安前期であることの論拠としては十分でなく、平安後期の稀な事例である可能性もあり、興福寺本の料紙の長さをもって平安時代後期に降る可能性を排除することはやや慎重さに欠けるように思われた。興福寺本の書写年代については、先行研究を踏まえた、今後のさらなる研究を俟ちたい。

第四に、細かな点ではあるが、語釈にお

いてやや違和感を覚えた点があった。例えば、上序の「録」についての注で、「録」は、しるす、かきつける（字通）で、「撰」えらぶ、のべる（字通）とは異なる。「景戒録」という記述は、すでにあった著述・文章などを選択・編集したのではなく、上序後段にある「側聞」した「口説」を採録・記録したものが霊異記だという説明と照応している可能性がある（二〇頁）とするが、当該部分は『冥報記』序に「輒ち聞く所を録して、集めて此記を為る」とあることとの関連を考えるべきであろう。先行する中国説話を見ると、宋・張演『統光世音応驗記』序には「右十条。……曾見傳氏所録、有契乃心。即撰所聞、繼其篇末」とあるように、六朝期以来、応驗記や説話集の序文に、編者が聞いた説話を「録」「撰」したと記すことは常套手段であり、そうだとすれば、上序は景戒が先行する中国史料の影響を受けて記した可能性が高く、個別の字句の辞典的な意味からのみでは景戒の宗教的営為を理解することは困難ではなからうか。

やや微細な点にまで及んだが、いずれにしても本書が刊行されたことの意義と成果

は大きく、中・下巻の刊行が俟たれるところである。なお本書については、三舟隆之氏（『日本史研究』六四〇、二〇一五年）による書評もあるので、あわせて一読いただければ幸いである。

（ふじもと・まこと 慶応義塾大学文学部助教）
（A5判、四二四ページ、八六四〇円、法蔵館、二〇一五・三刊）

五味克夫著

『鎌倉幕府の御家人制と南九州』

小川弘和

本書は五味克夫氏の膨大な業績を、教えるの方々が全三冊にまとめる事業の一冊目として、御家人制・南九州三国の図田帳・大隅正八幡宮についての論文を収録する。その業績は当該分野の基礎として重要な位置を占めるが、入手困難なものも多い。それが一望できるようになったことは、後学にとつては幸いというほかない。ここでは、本書のかかる性格を踏まえて、通例の

書評とは異なり、各部を要約しつつ、その業績の発展的継承のための方法を模索するという姿勢での紹介を行いたい。

まず構成は次のとおり（副題略）。

第1部 鎌倉幕府の御家人制

第一章 鎌倉御家人の番役勤仕について

第二章 鎌倉幕府の番衆と供奉人について

第三章 鎌倉幕府の御家人体制

第四章 在京人と籬屋

第五章 薩摩国御家人の大番役勤仕について

第六章 中世社会と御家人

第七章 東国武士西遷の契機

第2部 建久図田帳の研究

第一章 薩摩国建久図田帳雑考

第二章 大隅国建久図田帳小考

第三章 日向国建久図田帳小考

第3部 大隅国正八幡宮の研究

第一章 大隅国正八幡宮領帖佐郷小考

第二章 正八幡宮領加治木郷について

第三章 大隅国正八幡宮杜家小考

第1部は御家人制と御家人役についての論文を収める。東国・西国両御家人の立場

の相違と、それによる役負担の違いといった、現在の理解の基盤となる論点は、ここではほぼ尽くされている。また個々の御家人役について掘り下げる一方、庶子分出による惣領制の変質を、薩摩を舞台に論じる。そこには守護と惣地頭を島津氏が兼ねる点や、そのもとの諸勢力の西遷のありようなど、薩摩の地域性への目配りがある。このように第1部は、御家人制一般の検討からはじまり、鹿児島に奉職することで地域にその素材を得、さらに地域史そのものと分け入っていった、著者の軌跡をよく示す。

第2部は薩摩・大隅・日向の建久図田帳についての論文を収める。これらは、十分な書誌的検討抜きに利用されていた図田帳の、ほぼ初のまとまった基礎考証として重要な位置にある。また薩摩・大隅にまたがる万得領についての検討も特筆に値する。九州にはかかる広域散在所領が多く、その性格解明の端緒といえる業績だ。

第3部は、大隅国一宮であり、大隅・薩摩両国に幾多の所領を有した大隅正八幡宮についての論文を収める。ここでは、杜家体制と杜家の系譜を跡づけ、十二世紀前半